

GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 51
2018 AUTUMN

INDEX

ニュースレター拡大版に寄せて	02
編集部インタビュー「田中学環長ってどんな人？」	03
 TOPICS 1	04
東京大学制作展 Extra2018 “Dest-logy”	
 TOPICS 2	07
2017年度 日韓台シンポジウム“Media in Globalized Asia”	
 NEWS	10
国内初「5G」ドローンを用いた4K映像のリアルタイム伝送に成功／ 人工知能を使った「記憶の解凍」ワークショップ／ 高知県と情報通信技術に係る技術および学術交流のための協定を締結／ ヒューマンオーグメンテーション学(ソニー寄付講座)シンポジウム 「The Future is Already Here:SFと人間拡張の未来」／ 研究と社会をつなぐ映像制作／東京大学情報学環オープンデータセンターが設立／ スマホだけでつくってみよう、2分動画／シンポジウム「これからのジャーナリズムを考えよう」	
 PEOPLE	12
人事異動／着任教員自己紹介	
 CONGRATULATIONS	13
学際情報学府学位記授与式／教育部修了証書授与式／学際情報学府入学式・ガイダンス／入試説明会／合格発表	
 BOOKS	13
新刊情報	
 TIE-UPS	14
国際連携／社会連携	
 ADMISSIONS	15
在学者数／2017年度入試情報／修了者就職情報／特別奨学金プログラム	
 THESES	16
2017年度修士論文・博士論文題目一覧	

「ニューズレター拡大版に寄せて」

2000年に設立された情報学環・学際情報学府(以下、学環学府)は、まもなく20周年を迎えようとしています。学環学府はこれまで、いわゆる文系理系の区別を超え、「情報」をキーワードとした学際融合のフロントランナーとして走り続けてきました。異なる分野の学生や研究者との交流、協働ができるのは学環学府の大きな強みです。学府の学生には、特に企画力や行動力の高さを感じています。自ら課題を探し出し、行動にうつす機動力に優れています。

設立の頃に比べ、「学際融合」はさまざまな大学や研究科などでも進められ、一般的な取り組みになってきているといえます。学環学府は進化し続けていますが、その全体をどのように示すのか、難しさも感じています。今後、学環学府ならではのダイナミックな動きを、より発信していきたいと思っています。新しいことに挑戦し続けることは、学環学府のアイデンティティです。

そうしたチャレンジの一つとして、今号のニューズレターを拡大版としました。従来のTOPICSを特集として充実させ、写真も大きくなりました。これまで掲載してこなかった国際・社会連携、入試情報、修士・博士論文のタイトル一覧などもあります。学環学府の全体像をつかむメディアの1つとして、ぜひ手に取ってご覧頂ければ幸いです。

情報学環長・学際情報学府長
田中秀幸



編集部インタビュー 「田中学環長ってどんな人？」

— 研究テーマについて教えてください。

私の研究テーマの一つは、オープン・データやビッグ・データの活用および社会に与える影響についてです。例えば、国や地方公共団体が保有するデータをオープン・データ化することで、マクロ経済にどのようなインパクトを与えるかなどの研究があります。また、ビッグデータに関しては、ソーシャルメディアのデータから被災地の復興状況を推計できないかという研究を研究室で行っています。“people as sensors”などと言われることがありますが、集計に時間を要する統計データの限界を補い、よりリアルタイムに近い状況を把握しようとする試みです。

— 地方でのプロジェクトが多いのですか？

そうです。地域づくりに関するプロジェクトを日本国内の各地のご協力を得て行っています。今まで北海道札幌、京都府宇治、長野県諏訪、福島県会津などで、地域ブランディングやブロックチェーンなどの研究プロジェクトを他大学の研究者と共に進めてきました。これらのプロジェクトでは、「地域の自立的発展」を目標としています。「発展」は、量的な増加を意味する「成長」と異なり、質的向上や質的転換を指しています。私も現地の活動によく参加しています。宇治のプロジェクトでは、田んぼでの稲刈りや、モバイルトイレを運んだりもしましたね。地域の背景をより深く理解するために、現地の方々と一緒に汗を流して作業することが大切と考えています。

— 研究室にも沢山のご当地キャラクターのグッズが飾ってありますね。 はい。色々なところに出張した時に買ったものです。かなりの数でしょう(笑)。

編集部では、2018年4月に学環長・学府長に着任した田中先生へインタビューを実施しました。研究テーマについて伺い、研究室にお邪魔してきました。



京都府宇治市での地域情報化プロジェクトにてゲル(モンゴルの伝統的な移動式住居)を設置中



田中研究室にて



研究室に飾られたご当地グッズ

「田中先生の素顔」

～学環長秘書編～

学環長秘書の岡田さんに、秘書だけが知っている田中先生の素顔を伺ってみました。



学環長秘書の岡田さん

● 文明の利器を使いこなす
学環長交代のたびに変わる学環長室の風景。田中学環長の場合は「デジタル仕様」、何種類もの機器が並んでいます。入り口には、新たにスピーカーと人感センサーが設置されました。スピーカーは、会議などの際に学環長の元気の良さすぎるお声が外まで聞こえそうな時に流すノイズ音用、センサーは私の不在時、代わりに人の出入りを学環長に知らせてくれます。

● スリムの秘訣
普段、軽々とお仕事をこなしていられる田中学環長。それでも時には火の消えたロウソクのようなことも。回復の源はコーヒー豆の手挽きとおやつを食べること。心配するほど沢山召し上がることもありますが、スリムの秘訣はジョギングのようです。

～田中ゼミ生編～

田中研究室の学生に、田中先生について思うことを聞いてみました。

- メール返信がとても早いので、送信ボタンを押したあとも気が抜けない
- いつ休んでいるのかわからない
- 研究活動と一緒に遠くに出かけると、2回に1回の確率で交通機関のトラブルがある(※先生のせいではないのですが)
- 様々なガジェット(ポータブル拡声器、ポータブルプロジェクタ、キッチンタイマー)が出てきて鞆が四次元ポケット



学環長室にあるスピーカーと人感センサー



田中ゼミのメンバー

東京大学制作展 Extra2018 “Dest-logy”

東京大学制作展とは？

学際情報学府の授業の一環として、学生が主体的にコンセプト企画・作品制作・広報活動や会場設営などの運営を行う“テクノロジー×アート”の展示会。夏と冬の2回開催され、夏の制作展は毎年Extraと題し、冬の本番に向けた序章として位置づけられている。近年では、東京藝術大学や武蔵野美術大学などの学生も参加している。

2018年7月6日(金)から7月9日(月)までの4日間にわたり、東京大学制作展Extra2018 “Dest-logy”が本郷キャンパス東京大学情報学環オープンスタジオにて開催されました。

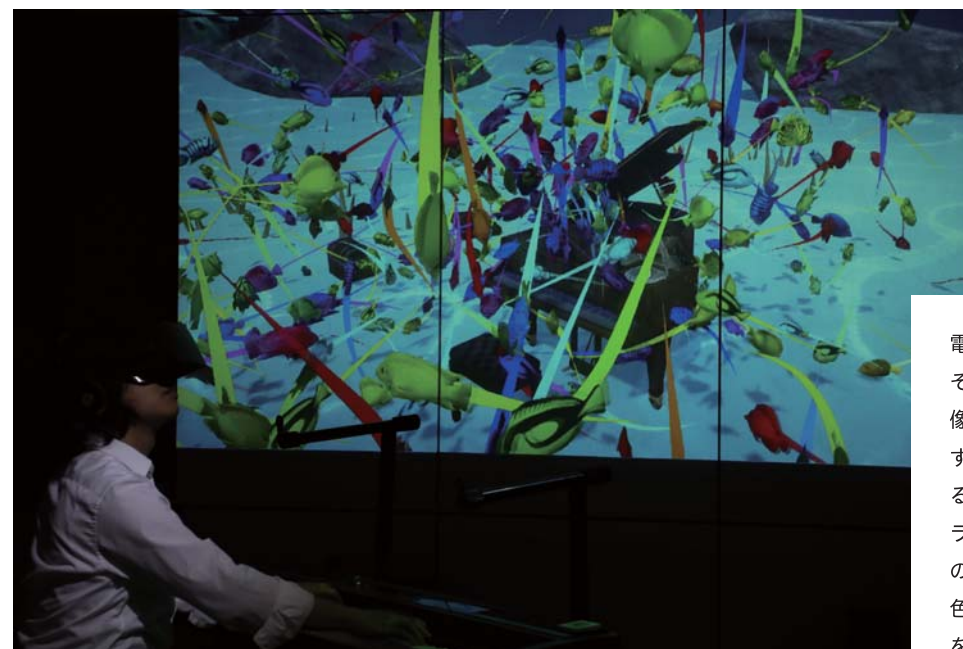
東大制作展Extra2018は、今までの「あたりまえ」について立ち止まって考える機会となることを目指し、“Dest-logy”というコンセプトを掲げました。VRを用いた体験型作品や、壁面を利用した映像作品など、例年を超える全14作品が展示され、のぞいてみたり、触ってみたり、体を動かしてみたり、「あたりまえ」をこわす体験に挑みました。4日間を通して著名人やアーティスト、企業の関係者など、学内外から合わせて925名の来場者を得て、例年以上の盛り上がりを見せました。



作品介绍

全14作品のうち、ここでは3作品について参加者のようすにもふれながら紹介します。

VR Piano Visualizer



ヘッドマウントディスプレイをかぶったことがない人でも、ピアノが弾けない人でも、思わず鍵盤をたたくのが面白くなるVR体験だったようです。パーッとカラフルな魚が広がると、「わー！」という歓声も。特にピアノが上手い人は時間が長くなり・・・順番待ちもしばしば。

音は目に見えず、減衰して消えていく。その音が幾重にも重なり、音楽となる。いつもは解き明かされることのない音楽という複雑な構成物。「音は目に見えない」という常識を取り払った空間でなら、その手がかりをつかめるかもしれない。あなたの奏でる音楽は、どのような姿をしているだろうか。

たか友康(東京藝術大学音楽学部4年)
山口紗穂(先端表現情報学コース修士1年)
橋本恵明(東京都市大学工学部3年)

電子ピアノとヘッドマウントディスプレイが用意され、それらの向こうにはプロジェクションされた海中の映像。海底には、1台のグランドピアノが置かれています。参加者は、まずヘッドマウントディスプレイをつけるように促され・・・すると、自分がその海のなかのグランドピアノの椅子に座っているかのような景色が目の前に広がります。そしてピアノを弾いてみると・・・音色にあわせて色とりどりの魚たちが現れ、自分の周りを泳ぎ始めるのです。

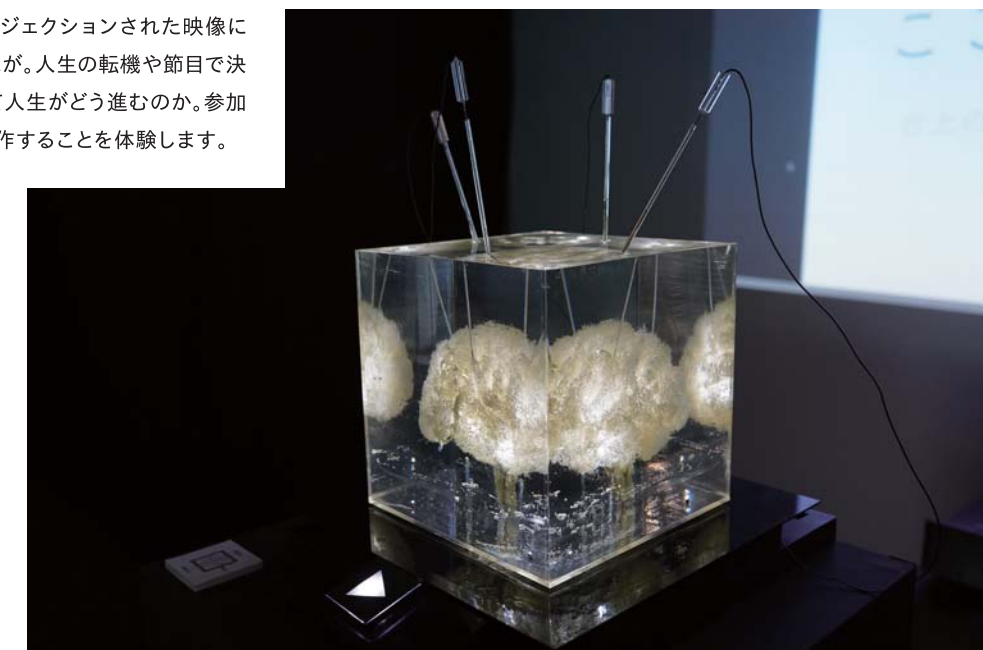
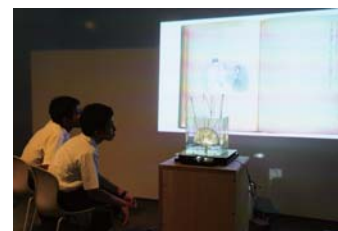
こころ(edited)

もし人の感情を、操作できるとしたら、人は救われるのでしょうか。人類は、進化過程で獲得し、しかし今の社会には未だ最適化できていない、原始的あるいは不可解な感情を宿しています。誰かを死に追いやるほどの極度の怒り、自らを死に追いやるほどの自己否定感。本作品で来場者は、各感情を司る脳の部位を操作し、特定の感情を獲得させる・失わせる行為を体験します。これは許されることなのでしょうか。

大杉慎平(総合分析情報学コース博士1年)
宮下珠実(東京藝術大学大学院美術研究科修士1年)
沼田俊之(先端表現情報学コース修士1年)
山田 渉(総合分析情報学コース博士2年)
秦 圭矢乃(情報学環教育部1年)
関 あゆみ(情報学環教育部1年)
三澤加奈(個人協力)

まず目に入ってくるのは、ガラスのように透明な立方体と、そのなかにある美しく光る丸い物体。よく見てみると、それが脳のかたちをしていて、上には細い棒が何本か刺さっていることに気づきます。前にプロジェクションされた映像には、ある男女の恋物語が書かれた小説のような文章が。人生の転機や節目で決断を迫られるとき、どちらを選ぶのか、それによって人生がどう進むのか。参加者はその棒を抜くことで、二人の決断を感情から操作することを体験します。

「次に何が起るのだろうか?」「違う選択をしたら、どう人生が変わるのだろうか?」と、エンディングとその変化をみるために長時間「操作」を試してみる人も。映し出される物語の世界に浸りながら、他の作品に比べて静かな時間が流れているようでした。



Sigh-arium



「ため息をつくとき幸せが逃げるよ」
そうして逃げた幸せはどこへ行くのか。
もしも幸せが身体から離れていくのなら、周りの空間があなたの代わりに幸せになるのか。
疲れたとき、失望したとき、ふと零れるため息。
これはあなたが零した幸せを、あなたの傍に少しだけ留めておく水槽。
吐き出された幸せは泡となって水中を漂い、花々がそれに反応する。
落ち込んだ自己への気づき、それに寄り添ってくれる光。
どうか、少しだけ前向きになれるように。

九鬼慧太(先端表現情報学コース修士1年)
畑田裕二(先端表現情報学コース修士1年)

会場に入ってすぐの場所に置かれた勉強机と椅子。机の真ん中にはパソコン、右側には本、そして左側には花の入った円柱型の水槽のようなものが置かれています。パソコンの画面には「椅子に座ってため息をついてください」という文字が。疲れたとき、落ち込んだとき、考え事をしているとき・・・自分なりのため息をついてみます。すると、水槽のなかにぶくぶくと泡が現れ・・・水中に咲く花がさまざまな色に変化します。

自分のため息がパソコンを通して水中の花の色に変換される。その体験を知り合い同士で来ていた参加者は、「○○のため息は赤いねえ」「○○は青だ」と言い合っていました。周りに来場者がざわざわと多くいるなかで、ため息をつくこと自体に照れたり、躊躇する人も。



次回の「東京大学制作展」

展示した各作品の詳細やキービジュアルをウェブサイト (<http://www.iiiexhibition.com/>) に掲載しています。SNSでも今回の展示作品や今後の情報を発信しています。

Twitter → <https://twitter.com/iiiexhibition/>

Facebook → <https://www.facebook.com/iiiexhibition/>

Instagram → <https://www.instagram.com/iiiexhibition/>

冬の本番、第20回東京大学制作展は、2018年11月15日(木)から11月19日(月)まで本郷キャンパスにて開催します。詳細な場所は決まり次第、SNSなどで発信する予定です。今回のExtraで得られたフィードバックをもとに、よりよい展示会にするために一生懸命準備しています。次回もぜひお越しください。

記事: 秦 圭矢乃(教育部、東京大学制作展広報担当)、鳥海希世子(特任助教)
お問い合わせ: seisakuten@gmail.com

※本記事には、「Dest-logy」の作品展示(一部)も行われた「高校生のための東京大学オープンキャンパス2018」の写真も使用しています

TOPICS 2

2017年度 日韓台シンポジウム “Media in Globalized Asia”

日韓台シンポジウムとは?

1996年度より東京大学社会情報研究所と韓国ソウル大学校新聞放送学科の間で始まった国際シンポジウム。毎年秋(10月~11月)に開催される。2017年度から台湾国立政治大学が加わり、「日韓台シンポジウム」となった。22周年を迎える2018年は、台湾・台北で実施される。

2017年11月24日と25日の2日間、東京大学情報学環・福武ホールにて「日韓台シンポジウム」が開催されました。東京大学大学院情報学環・学際情報学府(以下、東大)と韓国・ソウル大学校社会科学大学言論情報学科(以下、ソウル大)に加え、台湾・国立政治大学伝播学院(以下、政治大)の学生を迎えた初めての会となりました。

シンポジウム初日は、午前中にオープニング&プレナリースピーチとファカルティ・セッションが、午後に学生・ポスター・セッションとワークショップが行われました。2日目には、アーツ千代田3331を見学し、ザ・ハフィントン・ポスト・ジャパンの竹下隆一郎編集長によるレクチャーを受け、オンライン・ジャーナリズムについてディスカッションを行いました。以下、シンポジウムのようすを紹介します。

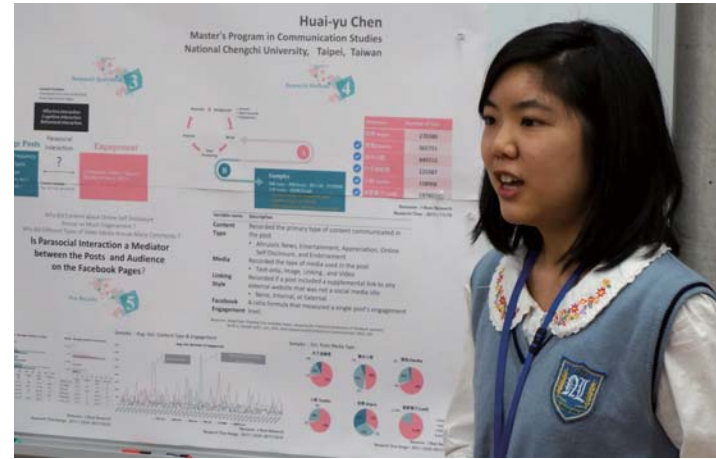
オープニング&プレナリースピーチ

佐倉統学環長(当時)をはじめ、3大学を代表し、ソウル大学の姜明求先生、政治大の施琮仁先生、東大の林香里先生から挨拶がありました。姜明求先生によると、日韓シンポジウムがはじまったばかりの1980年代、「アジア」という考え方は今日ほど明確ではありませんでした。しかし、その後、20年以上続いてきたシンポジウムの歴史は、林香里先生がご自身の経験から振り返るように「グローバル化の過程」そのものでもありました。政治大の施琮仁先生からは、これまでの交流を踏まえ、さらなる発展を展望するお言葉が贈られました。

ファカルティ・セッション

続いて、3大学の教員による最新の研究発表が行われました。政治大の陳百齡先生は、家族や家系をめぐる歴史研究とデジタル視覚化ツールを用いたネットワーク分析を結合する研究方法について説明しました。ソウル大のキム・ウンミ先生は、MIM(モバイル・インスタント・メッセージ)とSNSにおけるニュース記事の共有行為に注目し、インターネットユーザーの自己呈示や自己印象管理などの動機を反映していると指摘しました。東大の額定其芳先生は、近世初期の司法記録を利用したアジアにおける法と文化をめぐる比較研究(「厳密組織型」(日本の江戸時代)、「安全指向型」(韓国)、「官僚型」(中国)、「権威型」(モンゴル))について発表しました。政治大の康庭瑜先生からは、若い女性のSNSユーザーにおける自己の性的対象化について文化資本や境界の観点からお話がありました。最後に、ソウル大のハン・キュソプ先生から資本主義市場ルールに基づく北朝鮮難民の行為に関する経済実験結果について紹介がありました。





スチューデント・ポスター・セッション

東大から9人、ソウル大から8人、政治大から4人の、全部で21名の学生による研究発表が行われました。ニュース、報道、世論、ソーシャルメディア、ゲーム、映画、テレビ研究、国際関係、女性史など、研究テーマは非常に多彩でした。セッションは通常の研究発表とポスターセッションを混ぜ合わせたスタイルで実施され、参加者にはそれぞれプレゼンテーション(10分)と質疑応答(10分)の時間が割り当てられました。英語を話すことに慣れていない学生にとっては大きな挑戦となりましたが、事前に作成しておいたポスターを用いながら、取り組んでいる研究について熱心に語る姿が印象的でした。フロアーからの質疑も活発で、将来の研究につながりそうなフィードバックも多数得られたようでした。

ワークショップ

ポスターセッション終了後、「UTご近所ストーリーテリング・ワークショップ」が行われました。3大学の学生たちがグループに分かれ、本郷キャンパス周辺を探索し、ストーリーを集め、共有しました。その上で、近隣住民をインタビューし、「東京大学の学生に対してどのような印象を持っているか」を聞くことがミッションとして与えられました。そこで、Soo-min KIM(ソウル大)、Xindi QIN(東大)、Yilin TSAI(政治大)、Dongwoo LIM(東大)のグループは、本郷周辺の写真館と画材店を訪問。最近、七五三の写真をよく撮っていると答えた写真館のご主人は「近頃の東大生たちはあまり聡明ではないのでは？」という印象を語ってくれました。また、画材店のオーナーからは、東大生は「社会からの大きな期待をプレッシャーに感じているようで可哀想に思う」という予想外(?)のコメントが寄せられました。各グループの報告を踏まえ、ファシリテーターの水越伸教授は、実践的思考につながる「地に足のついた知性」の重要性に触れました。

記事: 林 東佑(修士課程)、林 意仁(博士課程)、デビッド・ビュースト(特任専門員)
写真: 堀越 伶(修士課程)、鳥海希世子(特任助教)

日韓台シンポジウム・ アーカイブ公開

東京大学新聞研究所とソウル大学校新聞放送学科は1980年代後半、ソウル五輪に関する日韓報道比較などをきっかけに共同研究を実施し、組織的な交流をはじめました。両大学間の交流は、新聞研究所が社会情報研究所に改組した1992年度以降、より盛んになり、1996年度からは年に1度、持ち回りで開催される「日韓シンポジウム」に発展しました。大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所が合併した2004年度から両大学の大学院生も参加するようになりました。20周年を迎えた2016年度には台湾国立政治大学の教員がオブザーバーとして参加し、2017年度からは「日韓台シンポジウム」として、3つの大学の教員と院生の間における学術的交流の場を目指しています。

ソウル大学との長い友情を記念し、新しくパートナーとなった台湾国立政治大学を歓迎し、本シンポジウムが歩んできた記録を集め、東京大学大学院情報学環・学際情報学府のウェブサイトにて公開しています。3大学の交流をさらに深め、これまでの「経験」を共有の「記憶」として保存していくためにも、アーカイブ化を充実していきたいと思います。

記事: 水越 伸(教授)、河 旻珍(助教)

日韓台シンポジウム・アーカイブ

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/about/inter/ut-snu-nccu-sympo>



“A New Direction of Media Studies in Korea and Japan”(2002年)



“Media, Culture, and Politics in the Age of Digitalization”(2004年)



「日韓情報メディア社会の諸相」(2005年)



“Media and Communitas in the Digital Era”(2014年)

国内初「5G」ドローンを用いた4K映像のリアルタイム伝送に成功

2018年6月8日、中尾研究室では、KDDI株式会社と共同で東京大学柏IIキャンパスにて4Kビデオカメラ搭載のドローンによるリアルタイム映像伝送実験に成功しました。5Gの実サービスに近い形態でドローンからの4K映像リアルタイム配信は国内初となります。実験ではサムソン電子の5G実験システムを使用し、ビデオカメラ映像をドローンから送信するために5Gモバイル端末を用いています。上空の360度映像を4Kカメラで撮影し、その信号を0.5秒程度の遅延で劣化なしで地上に送信できました。送信された映像信号はキャンパスに設置した5G無線実験基地局で受信しました。高い位置から高精細な映像でリアルタイムに状況把握ができるため、災害や事故の現場でのより迅速な対応が可能となります。

記事：中尾彰宏(教授)



人工知能を使った「記憶の解凍」ワークショップ

渡邊英徳研究室では「記憶の解凍」をテーマに据え、デジタルアーカイブの制作・白黒写真のカラー化などに取り組んでいます。その一環として、2018年5月26日と6月23日(沖縄慰霊の日)に一般参加者を対象としたワークショップを日本新聞博物館企画展「よみがえる沖縄 1935」の催しとして開催しました。ワークショップでは、まずカラー化技術の講習を、次いでカラー化された写真をもとにした対話の場を設けました。カラー化のための非接触スキャンと自動着色は、スマートフォンのみで完結します。参加者からは、とても簡単な作業にも関わらず、もとの白黒写真の印象が劇変することに驚きの声があがりました。過去の資料の「凍りついた」イメージを最新技術で「解凍」し、コミュニケーションを創発することで、過去の記憶を未来に継承していくことを目指す活動です。

記事：渡邊英徳(教授)



研究と社会をつなぐ映像制作：ディベシュ・カレルさん(総長賞受賞者)インタビュー

アジア情報社会コースで博士号を取得し、現在、情報学環客員研究員を務めるディベシュ・カレルさんは、映像制作を用いた研究で東京大学総長賞を受賞しました。ディベシュさんは「映像人類学者」として、写真や映像などの視覚資料の持つ2つの役割について語ってくれました。ひとつは自分の現地調査の記録、そしてもうひとつは、学術の世界以外で一般の人々の目に触れることによって、そこに映し出された人々や社会についての関心を集めることです。彼が制作した日本でのネパール移民を主題としたドキュメンタリー映画は60以上の国際的な映画祭や教育機関で上映され、100万人以上の観客を得ています。現在、インドのプロジェクトが編集の最終段階に入り、最新作では日本に暮らすベトナム人学生グループの生活に迫ります。

記事：潘 夢斐(博士課程)



東京大学情報学環オープンデータセンター(UTODC)が設立

2018年1月18日、東京大学情報学環オープンデータセンター(UTODC: University of Tokyo, Open Data Center)の開所式が行われ、約100名の参加者が集まりました。2016年末の「官民データ活用推進基本法」制定、また2017年5月の「世界最先端IT国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」策定など、「データ大流通時代」の到来に際し、「データ」がヒトを豊かにする社会(官民データ活用社会)の実現が目指されています。このような背景を踏まえ、オープンデータに関する研究開発および人材育成を目的として、本センターは設立されました。学際的な立場から総合的にオープンデータに取り組む専門組織は、日本の大学では初めてです。開所式の後、30名程度のハンズオン研修が可能なオープンデータ・ラボの見学会も行われました。

記事：住友貴広(准教授)



高知県と情報通信技術に係る技術および学术交流のための協定を締結

情報学環は、高知県との間でIoT技術をはじめとする情報通信技術の教育研究の推進および、高知県における産業振興や地域課題の解決を目的として、両者が緊密な連携・協力関係を構築することに合意し、2018年6月12日にこれに係る協定書を高知県庁内で締結しました。尾崎正直・高知県知事は「IoTで県の課題を解決し、世界最先端の研究の成果を国内外に発信したい」と述べ、田中秀幸・学環長は「本協定を機に高知県の課題解決や産業振興に本格的に取り組む」と述べました。締結式、およびその後の質疑の模様は、NHK高知やテレビ高知、日本経済新聞や高知新聞などで報道され、高知県での注目度の高さが示されました。情報学環としては、この協定を機に高知県との連携をさらに深め、地域課題の解決や産業振興に貢献していきたいと考えています。

記事：越塚 登(教授)



ヒューマンオーグメンテーション学(ソニー寄付講座)シンポジウム「The Future is Already Here: SFと人間拡張の未来」

2018年3月26日、伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにてヒューマンオーグメンテーション学の公開シンポジウム2018が開催されました。「未来はすでにここにある。ただ十分に行き渡っていないだけだ」というWilliam Gibsonのメッセージビデオから始まったシンポジウムは、SFと人間拡張学の関係にフォーカスしたイベントでした。2017年度の寄付講座活動と今後の展望について味八木特任准教授から紹介があり、現在、暦本研究室で取り組んでいる跳躍力を拡張するドローンの話題などが報告されました。シンポジウム終了後の懇親会では暦本研究室の学生によるポスターセッションも開催され、ヒューマンオーグメンテーション研究や社会展開について活発な議論が行われました。

記事：ヒューマンオーグメンテーション学(ソニー寄付講座)事務局



スマホだけでつくってみよう、2分動画：MY HOMETOWNとしての東大

2018年2月6日、ニッポン放送との共同企画で情報学環メディアスタジオのクリエイティブ・ワークショップ「スマホだけでつくってみよう、2分動画」を開催しました。「MY HOMETOWNとしての東大」をテーマに、参加者はアイデア作りから撮影、編集、投稿までをスマートフォンだけで行い、2分間の映像作品を制作しました。学部生、大学院生、教育部研究生、研究員など、所属や年齢も幅広い参加者がグループに分かれて制作を進めました。全4チームが「憧れ」「ライフライン」「行きつけのお店」「通学路」と独自の視点と切り口を持った作品を完成させ、上映会も驚きや笑いの声が響いて大いに盛り上がりしました。半日という短い時間でしたが、参加者同士の協働を通じて、それぞれが自分の生活や普段考えていることを映像作品という形にすることができました。

記事：堀越 伶(修士課程)



シンポジウム「これからのジャーナリズムを考えよう」

2018年1月29日、東京大学安田講堂にてシンポジウム「これからのジャーナリズムを考えよう」が日本経済新聞社、米コロロンビア大学ジャーナリズム大学院、東京大学大学院情報学環の主催で開催されました。冒頭では、岡田直敏・日本経済新聞社代表取締役社長が141年の歴史を持つ日経新聞のデジタル化とグローバル化に伴う読者ニーズの変化に対する取り組みについて述べました。続いて、米コロロンビア大学ジャーナリズム大学院長のスティーブ・コール氏と英フィナンシャル・タイムズ編集長のライオネル・バーバー氏による講演が行われました。また、林香里教授の司会でパネルディスカッション「デジタル時代におけるジャーナリズムの役割」、佐倉統教授の司会で討論「AI/デジタル技術とジャーナリズムの未来」が行われました。

記事：カテリナ・カシヤネンコ(修士課程)



着任教員自己紹介



菅豊

教授

流動教員として東洋文化研究所から参りました。私は、日本と中国をフィールドに、地域社会の自然資源や文化資源をめぐるcommons、無形文化遺産の管理、伝統文化のトランス・ナショナリズム、ヴァンキュラー文化、さらに公共民俗学・公共歴史学といった「新しい野の学問」の理論と実践について民俗学の方面から研究しています。



廣野喜幸

教授

総合文化研究科から流動教員として着任した廣野です。科学哲学→進化生態学→科学史・科学論・応用倫理学・リスク論と渡り歩いてきました。現在は、科学技術リスクの対処法、生権力論から生/情報権力論への拡張、科学技術コミュニケーション論の体系化について、つらつら(うつらうつら?)考えているところです。



渡邊英徳

教授

首都大学東京から参りました。「記憶の解凍」が研究テーマです。「ヒロシマ・アーカイブ」などのデジタルアーカイブを制作しながら、過去のできごとの記憶を未来に継承する人々の営みのありようについて、実践的に研究しています。情報学環では、情報デザイン・コミュニティデザインの観点から、考察を深めていきたいと考えています。



寛康明

准教授

学生時代を過ごした学環に教員として「戻れる」こと、嬉しく思っています。五感による現実拡張やメディアアート制作、またマテリアルやファブリケーション技術を駆使したインタラクションデザインを行っています。学環は他ではできないことをやる「プロトタイピング」の場だと思えます。領域を超えたコラボレーションを楽しみにしています。



関谷直也

准教授

総合防災情報研究センターで、災害情報論、災害時の社会心理について研究しています。2011年以降は特に東京電力福島第一原子力発電所事故後の大規模広域避難、原子力災害の社会的影響を中心に研究を進めています。私は本教育部、大学院で研究を始めました。皆さんの協力を得て、情報学環ならではの防災研究を構築していきたいと考えています。



寺田透

准教授

流動教員として農学生命科学研究科から参りました。生命活動を担う、タンパク質や核酸、その他生理活性物質などの世界をコンピュータの中に再現し、その運動や相互作用を解析する分子シミュレーションを専門としています。情報学環ではよりマクロな視点でのシミュレーションや、ビックデータ分析などに、研究の可能性を拡げていきたいと考えています。



前島志保

准教授

総合文化研究科より流動教員として参りました。定期刊物に焦点を当てつつ、明治末期から昭和初期にかけての近代日本における出版・読書文化の大衆化現象を、他メディア・他地域の同様の現象と対比しながら調査・考察しています。近代的報道表現や日常的近代性言説の形成と変容にも関心を持って研究しております。学環の皆さんと研究を深めていければ幸いです。



大野志郎

助教

学習院大学、立教女学院短期大学を経て、着任いたしました。インターネット依存など情報技術により生じる問題を、社会心理学的手法で実証的に分析することを専門としております。情報学環においては、問題の分析だけでなく、解決・予防のための指針を明示できるよう、研究を進めたいと思います。



福嶋政期

助教

流動教員として情報理工学系研究科から参りました。苗村健教授が代表を務めるCRESTの特任研究員として東大に4年間在籍し、その後、JSTさきがけの専任研究員として産総研で活動していました。ARやVRを利用し、人の記憶に残りやすい感覚提示技術を構築し、英単語学習に応用することに取り組んでいます。

人事異動

平成30年4月1日付

【教員】

配置換(転入)

菅豊 教授 東文研より
廣野喜幸 教授 総文より
前島志保 准教授 総文より
寺田透 准教授 農より

採用

渡邊英徳 教授
寛康明 准教授
大野志郎 助教
猪村元 特任講師
山岡潤一 特任助教

昇任

関谷直也 准教授

【事務職員】

配置換(転出)

小林晃 事務長 教育へ
安藤昭浩 学務係長 農へ
小畑珠貴 図書係主任 農へ

配置換(転入)

稲田高規 事務長 教養より
横坂満 学務係長 農より
大谷朱美 図書係長 図書より
小島裕美子 図書係主任 医より

採用

海野智子 事務補佐員

平成30年5月31日付

【事務職員】

任期満了

柏木恵美 事務補佐員
高野博子 派遣職員

受入

平成30年6月1日付

【事務職員】

受入

村田玲子 派遣職員

平成30年7月1日付

【教員】

配置換(転入)

福嶋政期 助教 情理より

【事務職員】

配置換(転出)

平原康道 専門職員 出向 国立情報学研究所へ
宍倉道郎 総務係長 附属病院へ

退職

野崎真理 事務補佐員

配置換(転入)

松井照治 専門職員 附属病院より
大本学 主査(兼:総務係長) 理学部より

受入

久保美和 派遣職員

平成30年7月15日付

【教員】

任期満了

河灵珍 助教
→ 短時間特任助教へ

平成29年度大学院学際情報学府学位記授与式

3月22日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の学位記授与式が行われました。佐倉学部長(当時)より修士課程修了者66名、博士課程修了者6名に学位が授与され、その後、優秀修士論文発表会が開かれました。

平成29年度大学院情報学環教育部研究生修了証書授与式

3月15日、福武ホールラーニングシアターにて教育部研究生修了証書授与式が行われました。修了者は18名と例年に比べて多く、列席した10名の修了生に対して、佐倉学環長(当時)より修了証が授与されました。

平成30年度大学院学際情報学府入学式・ガイダンス

4月3日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の入学式とガイダンスが行われました。ガイダンスは午前と午後の2部構成で実施され、田中学府長より「情報」を中心とした学際融合の重要性と、多様な各コースの紹介を交えた祝辞が贈られました。

平成31年度学府入試説明会

6月2日、平成31年度学際情報学府入試説明会が福武ホールで開催されました。330名を超える参加者が集まり、前半では各コース長からのコース紹介が、後半では全コースの研究が一堂に会するブース展示が行われました。

合格発表

8月31日、平成31年度修士・博士課程入試(夏季募集・2019年4月および2018年9月入学)の合格者発表がありました。出願者数は修士課程227名、博士課程15名でした。最終合格者数は表の通りです。

修士課程最終合格者数		博士課程最終合格者数	
社会情報学コース	18		
文化・人間情報学コース	18		
先端表現情報学コース	25	先端表現情報学コース	3
総合分析情報学コース	15	総合分析情報学コース	5
生物統計情報学コース	11		
合計	87	合計	8



ポケット医薬品集 2018年版



著者名:澤田康文 著/龍原 徹 著/佐藤宏樹 著
発行年月:2018年2月
出版社:南山堂

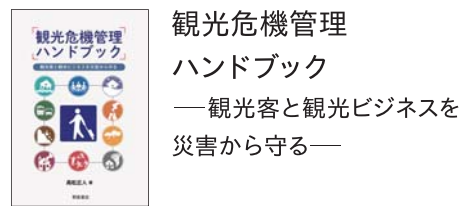
医師・薬剤師などの医療者は、医薬品を適正に使用するための情報(医薬品情報)を常に参照できなければなりません。本書は、膨大な医薬品情報から、重要エッセンスを抽出してコンパクトに整理した医薬品集で、毎年改訂しています。日常における医師の診療、薬剤師の薬剤業務に強い味方となる一冊です。(准教授:佐藤宏樹)

データでいのちを描く —テレビディレクターが自分でAIをつくったわけ



著者名:阿部博史 著
発行年月:2018年3月
出版社:NHK出版

NHKスペシャル『震災ビッグデータ』『AIに聞いてみたどうすんのよ!?ニッポン』をディレクターとして手掛けられてきた、総合防災情報研究センター阿部博史客員准教授が執筆したビッグデータとAIの解説書。メディアがビッグデータ、AIを活用し、いかに調査報道、データ・ジャーナリズムを実現するか、その実践の軌跡。(准教授:関谷直也)



著者名:高松正人 著
発行年月:2018年3月
出版社:朝倉書店

日本の観光危機管理、観光と防災の第一人者である総合防災情報研究センター高松正人客員教授初の著書。危機管理や防災の本質は現場の知からしか生まれぬものである。プーケット、沖縄、東日本大震災など、この本に詰まっている最先端の現場の知は、観光をはじめ様々な分野における危機管理や防災の道しるべである。(准教授:関谷直也)

終わらない「失われた20年」



著者名:北田暁大 著
発行年月:2018年06月
出版社:筑摩書房

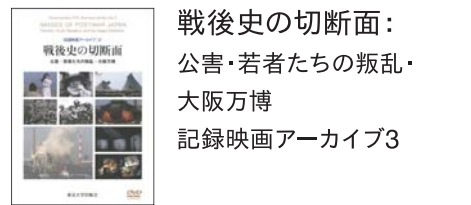
私がここ数年間の間に書いた時局論、対談・鼎談、往復書簡を「失われた20年」という観点から再構成したものです。話題になった上野千鶴子さんの移民論に対する批判は、もともとSNSで公開の当てもなく書いたものであり、そのぶん、私の実存的な問題意識が表に出てしまっているかもしれません。「社会学」が講壇学問では収まりえない剰余を持っていることをお伝えできると嬉しく思います。(教授:北田暁大)

戦後と災後の間 — 溶融するメディアと社会



著者名:吉見俊哉 著
発行年月:2018年06月
出版社:集英社

フクシマ、トランプ、イスラム国、スノーデン、パナマ文書等々、近年の国内外の出来事が示すのは、メディアと社会の溶融である。東京新聞等に5年間にわたり毎月連載してきた時評をまとめた本書は、東日本大震災後の2010年代を、1990年半ば、さらには70年代からの歴史の中で捉え、「戦後」と「災後」の間を考察。未来への展望を示す。(教授:吉見俊哉)



著者名:丹羽美之 編/吉見俊哉 編
発行年月:2018年07月
出版社:東京大学出版会

記録映画アーカイブプロジェクトの成果をまとめたDVDブックシリーズの第3弾。高度経済成長の陰で起こった公害や大学闘争を捉えた記録映画を読み解きつつ、映像が氾濫する現代社会の萌芽となった大阪万博とは何かを考察することで、戦後日本の転換点を浮かび上がらせる。付属DVDには貴重な記録映画7本を初収録。(准教授:丹羽美之)

国際連携

グローバル化のなかで情報学環は、日常の研究・教育活動の国際化を推進しています。最先端の情報学研究における「知の運動体」をめざし、世界の研究者とネットワークを構築するとともに、多様性を尊び、社会に貢献できる人材の育成に携わっています。英語のみで学位が取得できるアジア情報社会コース(ITASIA)では、世界中からの学生が学んでいます。

さらに、韓国ソウル大学校、台湾国立政治大学をはじめ、パートナーシップを結んでいる諸大学と定期的にシンポジウムなどを開催し、サマースクールも企画しています。また、国際的研究発信のためにWriting Support Deskを常設し、外国語で論文を書く学生や研究者への支援も行っています。

主要国際学術交流協定締結先

- | | | |
|-------------------------|-----------------------|----------------------------------|
| (アジア) | (中東) | (ヨーロッパ) |
| ●インド: デリー大学文学部、社会学部 | ●トルコ: ボスフォラス大学土木都市工学部 | ●英国: ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ社会学部 |
| ●韓国: ソウル大学校社会科学大学言論情報学科 | | ●ドイツ: デュースブルク・エッセン大学東アジア研究所・社会学部 |
| ●台湾: 国立政治大学伝播学院 | | ●フランス: コレージュ・ド・フランス |

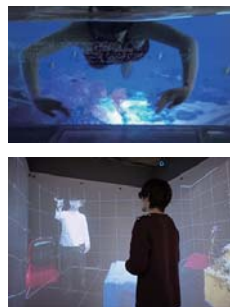
社会連携

情報学環では、社会に開かれた大学院を目指して多様な社会連携事業に取り組んでいます。外部有識者を顧問に迎えて「情報学環顧問会議」を設置し、社会の意見を問いながら組織運営を行っています。また、新しい情報知の創造を中核コンセプトに、哲学から工学、芸術から政治経済、コンピュータサイエンスからジャーナリズムまで、社会と有機的

に連携しながら、多分野を横断する研究教育活動を展開しています。現代社会がアクチュアルに直面している問題を解決するために、競争的政府予算に基づく大型の研究教育プロジェクトのほか、以下のような講座を設置し、積極的に民間・社会との共同研究に取り込んでいます。

現在の社会連携
1. ヒューマンオーグメンテーション学 / ソニー寄付講座 (2017.4~2020.3)

ソニー株式会社からの寄付を受け、人間の能力を拡張する情報技術の研究教育を推進する講座です。人間とテクノロジー・AIが一体化し、時間や空間の制約を超えて相互に能力を強化しあうIoA (Internet of Abilities) 未来社会基盤の構築に向け、ヒューマンオーグメンテーション (Human Augmentation) 学に関する研究開発を中心に、学生向けワークショップやサマースクール、一般向けシンポジウムなどを企画・運営しています。
(講座HP: <https://humanaugmentation.jp>)


4. 総合癌研究国際戦略推進寄付講座 (2015.4~2020.3)

武田薬品工業株式会社、日本化薬株式会社、株式会社ヤクルト、小野薬品工業株式会社、日本ビーシーエー製造株式会社からの寄付に基づき、アジアにおける癌研究の情報基盤形成を目指す学際研究を進めています。Universal Health Coverage (UHC) の日本とアジアのモデルケースの国際発信を中心に、薬剤開発のための研究ネットワーク構築、アジア域内大学連携による文理融合型研究基盤の創設、グローバル人材の育成を行っています。


2. DNP学術電子コンテンツ研究寄付講座 (2015.11~2021.10)

大日本印刷からの寄付に基づき、これまで情報学環でめられてきたデジタル・アーカイブやe-learningに関する諸々の知見を踏まえ、学術的な電子コンテンツの教育・学習活用について実践的な研究開発を行っています。これらの活動と並行して、将来的なナショナル・デジタル・アーカイブ構想も見据え、日本の学術系デジタル・アーカイブ構築に向けての連携的役割を果たせるよう努めています。
(講座HP: <http://dnp-da.jp/>)


5. 情報技術によるインフラ高度化・社会連携講座 (2014.4~2019.3)

東京大学大学院情報学環をはじめ、首都高速道路株式会社、東京地下鉄株式会社、東京電力株式会社、東日本高速道路株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所、日本電信電話株式会社が共同研究機関となり、ICTによる施設マネジメントの高度化、情報活用による技術支援・技術伝承の仕組みの確立を中心に、インフラ・イノベーションの実現を目指し、産学官が連携して実践的な研究に取り組んでいます。
(講座HP: <http://www.advanced-infra.org/>)


3. セキュア情報化社会研究寄付講座 (2015.4~2020.3)

株式会社ディー・ディー・エス代表取締役社長の三吉野健滋氏から寄付を受け、サイバー空間における課題について、巨視的長期的視座から学際研究、人材育成、政策提言を推進する講座です。「情報革命」が進行している中、サイバー空間における情報セキュリティおよび、その学際領域の研究、生体情報によるID管理や本人認証技術に関する研究を中心に、高度セキュリティ専門家・実務者の教育・養成も行っています。
(講座HP: <http://sisoc-tokyo.iii.u-tokyo.ac.jp/>)


【過去の社会連携】

- 角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座
- 反転学習社会連携講座
- ベネッセ先端教育技術学講座
- 電通コミュニケーション・ダイナミクス寄付講座
- OKIユビキタスサービス学寄付講座
- ユビキタス情報社会基盤学寄付講座

学際情報学環の在学者数(2018年現在)

修士: 244人	博士: 157人
----------	----------

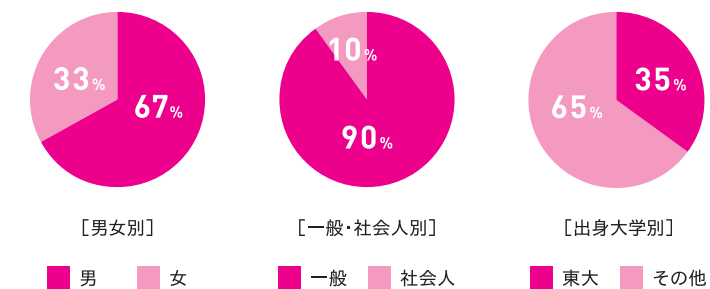
2017年度入試情報(募集人員、出願者数、合格者数、入学者数)

[修士課程](志願倍率: 2.77倍)

コース名	募集人員	出願者数	合格者数	入学者数
社会情報学コース	19人	56人	20人	19人
文化・人間情報学コース	29人	82人	28人	26人
先端表現情報学コース	19人	34人	23人	21人
総合分析情報学コース	19人	43人	18人	17人
		5人※1	3人※1	2人※1
アジア情報社会コース	14人	57人	19人	13人※2
合計(5コース)	100人	277人	111人	98人

※1 2016年9月入学 ※2 2017年9月入学

修士合格者内訳2017年度

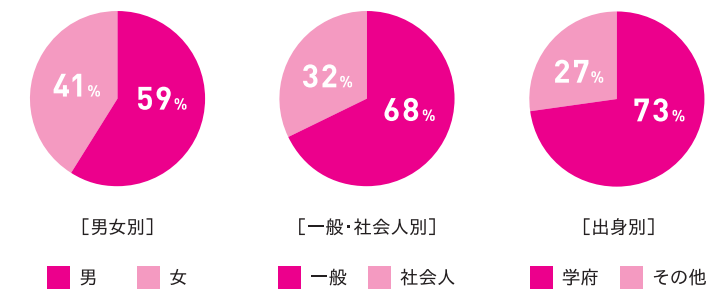


[博士課程](志願倍率: 1.16倍)

コース名	募集人員	出願者数	合格者数	入学者数
社会情報学コース	9人	13(8)人	6(4)人	5(4)人
文化・人間情報学コース	11人	13(8)人	9(5)人	9(5)人
先端表現情報学コース	8人	4(1)人	3(1)人	3(1)人
総合分析情報学コース	8人	4(3)人	4(3)人	4(3)人
		1(0)人※1	1(0)人※1	1(0)人※1
アジア情報社会コース	8人	17(2)人	8(2)人	7人※2
合計(5コース)	44人	51(22)人	30(15)人	29(13)人

()内は、内部進学者の数 ※1 2016年9月入学 ※2 2017年9月入学

博士合格者内訳2017年度


2017年度修了者就職情報

[2017年度修士課程修了者進路]

博士課程進学	16名
・学際情報学環	15名
・他大学	1名
就職	53名
その他	9名
合計	78名

[2017年度修士課程修了者就職先一覧]

M3, Google, JPモルガン・アセット・マネジメント, KAIST (Korea Advanced Institute of Science and Technology), KDDI, LINE, NTTドコモ, Panasonic, PUMCH, S&I, Sony Global Education, アクセンチュア、アマゾンウェブサービスジャパン、CLUE, LIFULL, NTTデータ、インテージ、エステック、チェンジウェア、デンソー、電通、ネットプロテクションズ、博報堂DYメディアパートナーズ、ビジュアルリサーチ、シミヤ社、三越伊勢丹システム・ソリューションズ、メルカリ、ワークスアプリケーションズ、グリー、ザイオソフト、山梨県裁判所、ソフトバンク、第一生命保険、トヨタ自動車、トレンドマイクロ、日本IBM、任天堂、みずほフィナンシャルグループ、モルガン・スタンレー・グループ、レキオソフト、TABI LABO、三井物産、赤坂文化社、特定非営利活動法人新宿環境活動ネットなど

特別奨学金プログラム

学際情報学環では、特別奨学金プログラムに応募することが可能です。博士課程教育リーディングプログラムは、グローバル社会で活躍する博士を養成するため、修士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行うものです。学際情報学環は、東京大学内に9つあるリーディングプログラムのうち、以下の3つのプログラムと連携しています。詳しくは、学環学環ホームページ(教育>特別奨学金プログラム)をご覧ください。

- ソーシャルICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム(The Graduate Program for Social ICT Global Creative Leaders, GCL)
- 社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム(The Global Leader Program for Social Design and Management, GSDM)
- 多文化共生・統合人間学プログラム(The Integrated Human Sciences Program for Cultural Diversity, IHS)

2017年度修士論文題目

1.社会情報学コース

- 技術のパラダイムシフトは日本IT企業へどのように影響したのか
 - IT技術のパラダイムシフトと技術経営
- 「帰宅困難者」政策の波及プロセス
- 「政治改革」報道の構築過程
 - 「マスメディアと政治」を巡る動態モデルからの分析
- 中低所得国におけるモバイル金融サービスを活用した金融包摂
 - 普及・利用に影響を及ぼす経済・社会的要因の観点から
- 地方移住に関する地域イメージの影響とその要因
- 自己呈示に関するソーシャルメディアと対面状況の比較研究
 - 若年層のTwitter、Instagram利用に着目して
- アクターネットワーク理論の構築過程
 - ブリュノ・ラトゥールによる経験的研究の通時的展開に着目して
- デジタル化された文化資源を享受するユーザーの法的利益に関する一考察
 - 知的財産法制と文化資源保護法制の協調によるデジタルアーカイブ推進に向けて
- 社会的弱者の支援とジャーナリズム
 - 〈問題解決〉へ社会を動かす報道過程分析
- 情報通信技術がシェアリングエコノミーに与える影響
 - 取引コストに着目した事例研究
- 公共放送における対抗的公共圏の編制・表象
 - NHKの総合福祉番組を検討事例として
- 現代中国におけるメディア融合の下での法制度整備とニュースのあり方に関する分析
- 外国人への排他性にかかるコミュニケーション要因の検討
 - 大学生のLINE利用に着目して
- SNSがもたらす政治コミュニケーションの変容可能性
 - 議員インタビュー調査から

2.文化・人間情報学コース

- 裁判員法廷へのドラマトゥルギカル・アプローチ
 - 市民参加が日本の刑事裁判に及ぼす影響
- サミュエル・ベケットの映像作品研究
 - カメラの主観性と機械性・オフの音声をめぐって
- メディア文化としての将棋
 - 新聞事業による団体・棋士・愛棋家の変容
- プログラミング学習におけるTinkeringの支援
 - 建設的試行錯誤を促すシステムの開発
- 母子の睡眠に関する探索的研究
 - ウェアラブルセンサを用いて
- 「環境学習施設」のネットワーク化に関する研究
 - 「都市・生活型環境教育」推進のための施設ネットワークのあり方
- ランキングのメディア論
 - 検索エンジン・ランキングの歴史社会的構成
- 映像視聴が顕在的・潜在的対外国イメージに与える影響について
 - 中国の理工系大学生の対米イメージを例に
- 日常場面における学習動態を用いた学習継続率推定手法の提案
- 日常的な事物の美的な要素に対する気づきを促すための教育的介入に関する研究
- ラジオCMをめぐる生態系
 - 資本・技術・キャリアの影響を解明する
- 科学技術社会と〈安全〉言説
 - 「遺伝子組換え食品」と「原子力発電」のレトリック構造
- 日本の雑誌は建築家をどう扱ってきたか
 - 1977年～2015年の安藤忠雄の表象に着目して
- 「文化的多様性」の展示戦略
 - オーストラリアのミュージアムを事例に
- 対話システムの倫理に関する哲学的検討
 - 枠組みとしてのカプトロジと媒介理論の有効性

- 自治体首長のSNS活動とオンライン上の反応
 - 政令指定都市市長を中心に
- 教室外活動と日本語学習意欲に関する考察
 - 台湾における学習者に着目して

3.先端表現情報学コース

- 表面装飾を制御できる柔軟物インタフェースの構成手法と応用
- 体験型展示のためのARとVRのシームレスな接続に関する研究
- 可視光通信プロジェクタの高画質化・高効率化を実現する符号化方式
- 食のマルチメディア処理
 - 食事画像認識と食トレンドの検証
- ロボットによる液体操作における認知行動制御に関する研究
- 複数のカメラ・センサ間での動き情報を手掛かりとした人物同定
- スマートフォンにおける1タップ個人認証方式
- 画像のカラーテーマ決定とそれを利用した色編集
- 疎なジオタグ情報を用いた映像の高精度3次元復元
- スマートフォンセンサー群を統合した多機能ドライブレコーダーの研究
- テーブル型対面環境における直立空中像の移動制御とその応用
- クフ王第二太陽の船の部材デジタルデータを用いた3次元形状復原
- 聴覚刺激を用いた仮想空間にける行動誘発に関する研究
- 棘皮動物型人工生命の挙動生成に関する研究
- 生体発光を伴う微細水生生物の可視化手法に関する研究
- 購買履歴データに対する最適な匿名加工手法の設計と評価
- ペロース型空気圧筋を用いた伸長可能な柔軟連続ロボットアームの開発
- 温冷刺激による錯覚を利用した仮想辛味提示手法の提案と評価

4.総合分析情報学コース

- ゲーム内のエージェントに対する名前の付け方と呼名がインタラクション内容に与える影響
- 身体情報の抽出によるスポーツトレーニング支援
- スマートビルディングに適した音声インタフェース
- 都市における空間把握能力と目線の高さの関係に関する研究
- 選択肢分布が選択の一貫性に及ぼす影響
 - 魅力効果を題材とした分析
- ランドマークに基づいた歩行者向け経路案内の自動生成とその効果に関する研究
- 深層学習を用いた音声インタラクションの拡張に関する研究
- 通信者の存在感を伝達する全天候カメラコミュニケーションの研究
- ブロックチェーンを用いたGlobal Numeric ID 分散発行・割当基盤
- ソフトウェア化された5Gシステムにおけるネットワークスライシングのリソースアインレーションに関する研究
- 装着型マルチローターシステムを用いた人間の跳躍力拡張に関する研究
- 2004年新潟県中越地震群における上越新幹線沿線の広帯域地震動シミュレーション
- 未来予測による描画支援に関する研究
- 機械学習による不完全情報ゲームのプレイヤーの性能改善と公平な競争環境のためのマップ生成についての研究
- コンテキストアウェアな実空間アクセスコントロールモデルに基づいたスマートビルディングの鍵管理機構
- 案内標識の地名表示および認知地図の階層構造を考慮した経路案内に関する研究

5.アジア情報社会コース (ITASIA)

- YouTube and Public Sphere Theories: A Case Study on Senkaku/Diaoyu Islands
- Intimate Idols: A Case Study on the Japanese-Korean Boy Group BEESHUFFLE, their Affective Labor and its Implications for the Idol-Fan Relationship
- Call of Duty: A Case Study of ICT Integration in Philippine Provincial Public Schools in San Isidro Davao Oriental Post K-12 Implementation
- Fragmentation of Codes in Fujoshi Community on Twitter: A Research on Tweeting Patterns and Learning Process of Fujoshi Online

- Social Media and the Tourist Experience
- The Vacant City: An Ethnography of Alternative Spatial Cultures in Post-growth Tokyo
- Chinese Participatory Culture on a Danmaku Website: Technology, Content, and Interactivity
- Advertising in Transit: Advertising Trends in the Tokyo Trains
- Science Communication in Vietnam: An Investigation on Attitudes and Current Practices of Researchers and Relevant Organizations
- The Cost of Starting-Up: The Field Study of Innovation of “Work” by Student Start-Ups in Tokyo
- Rethinking Journalistic Professionalism in the New Era: How Journalists are Responding to the Objective Ideology in Hong Kong
- Sense of Insecurity about Aging Issue and Healthcare System in Japan and China
- Making Sense of Japanese Violence: Chinese Audience’s Reading of TV News Reports of the Sagami-hara Stabbings

2017年度博士論文題目

- 復興期のコミュニティにおける調整機能の維持戦略
 - 緊急コミュニティ組織による分業構造を視点として
- The Research of IoT Architecture for Open Services in Smart Buildings
- 顔ディスプレイを用いたテレプレゼンスシステムに関する研究
- 文楽人形遣いの動きと呼吸
- Military Threat Perception in Postwar Japan: the Soviet Union, China, and North Korea
- 元留学生外国人社員の日本企業における適応に関する研究
- 1920～30年代、帝国日本と植民地朝鮮において映画を見るということ
- A Multi-sited Visual Ethnographic Study on the Nepali Migration from Malma to Japan: Network Migration, Transnational Ties, and Social Transformation
- Scandal, Ritual and Media in Postwar Japan
- Human Augmentation by Inter Personal Communication with First Person Visual Media
- 地域イノベーション・システムに関する研究
 - ITS(Intelligent Transport Systems)の例から
- Proceeding in Hardship: The Process of Institution-Building and the Evolution of China-Japan-South Korea Trilateralism
- 高齢者の法律相談へのアクセスに関する実証的研究
 - 高齢者、法専門家、行政・福祉関係機関を対象として
- オフ・スクリーンのメディア史
 - 戦前期日本の映画館プログラムをめぐる〈読むこと〉〈書くこと〉〈観ること〉
- 新人看護師の臨床実践能力の向上に資する看護チーム内の社会的相互作用に関する研究
- Language as Process: Tokieda Motoki’s Theory of Language at the Intersection of Linguistics and Philosophy
- 創作に着目したコンテンポラリーダンス教育プログラムのデザイン指針の構築
 - ダンスを専門としない大学生を対象として
- 青少年の逃避型インターネット使用と依存形成の構造分析

あとがき

ニューズレター、今回は冊子形式の拡大版でお届けしました。学環学府の多彩なアクティビティが、視覚的にもよりわかりやすくご紹介できたのではと思います。学環学府が掲げている「学際」は、既存の学問の境界にとらわれず、常に未知のものに挑戦するフロンティアの精神です。私が最近お会いしたSF作家 William Gibson さんの有名な言葉に、“The future is already here — it’s just not very evenly distributed.”(未来はすでにここにある — ただ均等に行き渡っていないだけだ)があります。学環学府も、常に「すでにここに未来がある」という場であればと思っています。(暦本純一)

GAKKAN 51 2018.10
 東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
 Interfaculty Initiative in Information Studies
 and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員：暦本純一、水越 伸、渡邊英徳、David Buist、岡田美保、潘 夢斐、城 啓介、福岡政期、河 灵珍、鳥海希世子
 デザイン：MARUYAMA DESIGN 丸山智也

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>